

大学をとりまく社会環境と仏教教育

提言：大学に求められているもの

身延山大学学長 仲澤浩祐

今や高等教育への需要は高まり、大学・短大への進学率は45%を越えた。だが、18歳人口は急カーブを描いて減少し、高齢化が進んでいる。かたや情報化、国際化の時代が到来している。このような状況化で大学教育に求められているものは何であろうか。

戦後新制大学が設立され、アメリカ型の教育が導入された。そして平成3年7月「大学設置基準」が改正され、いわば、新新制ともいべき大学が生まれている。この改正は、設置基準の大綱化・簡素化と共に、自己点検・自己評価を柱とするものであり、量から質への転換であった。すなわち設置基準による規制を緩める一方で、各大学に自助努力を求める極めて厳しいものである。この改正によって、大学は否応なしに、大学の理念や運営、カリキュラムや授業などの見直しをせざるを得なくなったのである。

大学の大量化は、大学に多くの変化をもたらした。というより、変わらざるを得ない状況となってきている。つまり学生が、多様な経歴、多様な能力や適性をもって入学し、加えて社会人・留学生などが入学してくる中で、大学教育はどうあるべきか、どう改善していくか、という非常に難しい問題を抱えることとなったのである。

因みに大学審議会では〔高等教育における現状の問題点と今後の課題〕について審議しており、その中の「高等教育の一層の改善について」と題した審議の概要を見ると、

- 1) 高等教育の普及とそれに伴う変化の著しさ
- 2) 急速な学問の進展と教育すべき内容の高度化・専門化
- 3) 社会・経済の急速な変化に対応し得る幅広い視野や総合的な判断力、豊かな創造性を持った人材の養成
- 4) 生涯学習のニーズの高まりに応え得るだけの教育の必要性

の四項目を、大学教育を改善していくための視点として挙げている。

ところで現代は、従来の価値観ではとても測りきれないほどに多面的になった時代であり、情報化した時代である。また消費文化の時代ともいわれ、それに伴って効率性、便利さがもてはやされるようになった。たとえば、マニュアルにしたがってセットしておけば、洗濯物は洗いから濯ぎ、脱水、そして乾燥までしてくれるし、ビデオは好きなテレビドラマや番組を予約しておけば録画してくれるようになり、確かに便利になった。

しかし、個々人はますます孤立化、個別化を深め、自己中心的になってきている。そして自らの頭で考え出す力が欠けている非創造的な学生、困難にあうと投げ出すか、逃げてしまうひ弱な若者たちが多くなった。こうした状況を踏まえて、大学教育をどう行うかということを考えなければならない。今や大衆化した大学にあって大学の教員は、かつてのような独善も孤高も尊大も許されなくなってきている。常に学生と向き合い、学生の求める知識・技術等を提供しなければならないのであり、従来のように研究のみに没頭していることは許されない状況となり、教育的側面が重視させるようになった所以もここにあるといえよう。いずれにしても、就学人口の激減と大学の大衆化、さらには戦後始まって以来の大学設置基準の改正施行により、教育課程の編成を始め、教職員と学生との関係、研究と教育の相互関係が厳しく問われ、大学は大きな転換を余儀なくされている。いわば大学観の転換を求められているのである。

翻って、日蓮宗門は宗祖日蓮聖人の「行学の二道をはげみそうろうべし」を

態して子弟教育を行ってきた。宗門伝統の学則とは、1. 給仕、2. 行法、3. 学問であり、飯高檀林に発する立正大学、西谷檀林に発する身延山短期大学はこれを方針として教育を行ってきた。今日では総合大学として発展した立正大学においては仏教学部でこの精神が語られていることであろうが、昨年発足した身延山大学においてはこの教育方針を柱としてその具体化を図っている。しかし、現状は必ずしも容易ではない。人間の資質が着実に低下し、個別化、没社会化が進み、社会環境が大きく変化し、ますます社会は激動し、混乱を深めている状況に鑑みると、伝統ある子弟教育観をあらためて見つめ直す時期に来ているのではないだろうか。

このような状況の下で、(1) 宗門子弟をどのように育成するか、(2) 仏教教育の社会的役割はいかなるところに求められるか、(3) そして大衆化が進む中で、大学生をどのように育成するか、ということ視野に入れつつ、仏教の精神を踏まえた宗教教育の方向性を問い、殊に宗門の子弟教育と僧道教育の在り方を問い直していきたいと考えるものである。この「大学をとりまく社会環境と仏教教育」が日蓮宗門を始め、仏教教育を施している高等教育機関や寺院にとって、飛躍への端緒を提示するものとなれば幸いである。

大学の大衆化が進む中で、 大学生をどのように育成するか

身延山大学教授 深山正光

1、「大学の大衆化」と「変動する社会」の捉え方について

「大学の大衆化」といういい方が、いつ、どのような事態をさして、どのような意味でいわれたかは定かではないが、高校卒業生のうち、大学・短大への

進学率は、60年代の高度経済成長期で17.2%から25.4%へ、70年代では25万人も高校卒業生が増える中で、社会的生産力の高まりを反映して、24.2%から34.2%へとそれぞれの高まりがあり、現在では37.6%に達している。専修学校等への進学率30.5%という数字をも考慮すれば、中等教育後の教育の量的発展は著しいとみることができる。

大学の「大衆化」の意味を、単に量的な拡大と捉えるのではなく、質的な発展として捉えるのならば、大学・高等教育が一部エリートのためのものではやなくなり、広範な青年のものとなった、民衆化した、民主化した、あるいは民主化する可能性をつくりだしているといえる。そしてそこには、国民的教養の高度化への客観的な要請があり、かつ国民的アカデミズムの実現の可能性が開かれつつある、と私は捉えたい。したがって、「猫も杓子も大学へ」といったジャーナリスティックな捉え方を峻拒することは当然であり、「低学力の大学生」の問題も、実は、後述する今日の高校教育の在り方の問題だと考える。

「変動する社会」、「激動する社会」ということについては近年多く聞かれるようになり、今年の7月に中央教育審議会が文部大臣に出した「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という答申では、「これからの社会」は「変化のはげしい社会」であり、しかも「先行き不透明な時代」であるといわれている。いずれにしても、戦後の日本は生産面、労働面、生活面において高度化と複雑化を生み出し—そこには、一般的に、社会及び社会生活の変化の中に当然に含まれてはいるが—それ自体として問題にすべき教育のあり方の問題、大学として考えるならば、その前段階の初等中等教育の在り方の問題が、それとして検討されるべきであろう。むろん、社会の変化、生活の高度化の中での子どもの教育に対する親の期待、子育ての変化、何分にも子どもは消費者として尊重されるという商業主義の発達等、これらが綯い交ぜになって今日の大学生の意識状況がある。いずれにせよ、社会の変化とは別に、高校教育のあり方がどうであったのか、現在はどうなのかという問題を検討することが避け

られない課題である。

2、高校教育のあり方

そこで次に、高校教育の在り方の特徴、高校生の状況を、70年代、80年代そして今日とそれぞれの特徴をみておきたい。

70年代の高校生の状況は、一言でいうならば、高校教育の多様化の名の下に教育課程の細分化が進み、差別と選別の教育が進んで、受験地獄が深刻化した。そして、その中で多くの高校生の学ぶ意欲や喜びが損なわれ、非行の増大が進んだ。総理府が75年に行った「青少年の連帯感などに関する調査」によると、高校生活への希望の内容として、志望に沿わない学校への進学への悩み、授業についていけない悩みなどが48%、57%と大きく、学力低下や学習の遅れなどが社会問題化し、高校の多様化政策への批判が強まった。

80年代には、大学入試共通一次試験の実施(79年1月から)や偏差値による輪切り選別が進み、高校での教育が大学入試に向けて再シフトされた。希望する高校に進学できない悩み、授業についていけない悩みが一層広がる中で、体罰の横行や生徒の自主性を考慮しない管理主義教育の広がりも、深刻な問題となった。

そして90年代では、「エリート育成」に事実上重点がおかれた偏差値輪切り教育、管理主義教育が支配的となり、成績による差別、人間の序列化が進んだ。94年に行われた、文部省の「学校教育と学校週五日制に関する意識調査」でも、高校生の学校生活に対する不満として、53%が「自分の成績のこと」をあげ、40%が「授業の内容ややり方・進め方」に不満を表明し、さらに34%が「学校規則」を不満としてあげている。髪型や服装の検査が行われ、生徒が息苦しさを感じているということである。

このような高校生活の中で、学生はそれぞれの受験勉強をして、格差づけられた大学—それも一部を除けば大体入れそうな大学・学部・学科—へと進学す

る。日本の大学は世界一学費が高く、生活費がかかるという点ではほとんど共通であり、また概して学習条件、勉学条件は劣悪で、大学進学の実質的な目的は所定の単位、あるいは資格を取って就職していくことだけが大学進学の実質的な目的となっている。

3、大学生の実態

10年前、私は静岡大学で人文学部と教育学部のいくつかの講義を担当した。人文学部での担当は、諸学科に在籍する多様な学生に、中学・高校の教員資格を取得するための中等教育原理の講義であった。できるだけ、彼らの専門に関わる一般教養的な事柄を聞き出し、それと結びつけて現代教育の科学的原理や民主的な原則を提起しようとした。しかし、各学生の専門分野についての術語については、言葉を知っていても内容を知らないという現状であった。いずれも中学生で習うレベルのもので、私は受験競争の激化がいかに国民的な教養をみすばらしくしているかを実感したのである。教育学部での教育原理の授業はもっとひどく、幻滅的であった。

外書購読の10名前後の授業では、非常に難しいテキスト20頁程度を半年かけて読んだが、最後まで食いついてくる学生は1人いればいいという状況であった。英語の辞書の他、様々な事典で調べることを最初に要請したが、中学生用の辞書で単語を日本語に置き換えるだけで、その文脈や事柄を調べずに、意味が分からない有様で、専門用語については、『現代用語の基礎知識』を使って説明しても意味がわからないという、散々たるものであった。

講義以外の活動に目を移すと、学生はコンパや遊びでは仲間を作る、つまり生活的なつきあいはある程度できるのだが、真に仲間が作られ、集団化しているかといえば疑問を感じざるを得ない。自治会も存在したが、ほんの一部の学生が形だけ参加するといった、一般的にはきわめて受動的な対応であった。結局、学生の生活は教員の採用試験に合格するための勉強と、多様なアルバイトが主

であった。受験競争の中で「考えない」学生気質が出来上がっているために、調べて理解させ、考えさせる授業の試みは成功しないのである。

ところで、当身延山大学での講義は、この10月に始まったばかりだが、6～7名の授業が2コマある。学生の生活は、高校生も含めて行学寮・本山・坊・アパートと多様な居住空間で送られている。7月のはじめには行学寮の生活を実際に体験し、寮生のしっかりとした目的意識を知って、驚愕した。

むしろ、楽観的に構えられることばかりではなく、学園祭では彼らの自主性を全くみることができずに、これからの課題として解決していく必要性を感じた。また、選別と競争の高校生活を経験している学生が、来年の3月に50年を迎える教育基本法の、「自他の敬愛と協力によって」育てられ育つという原則を、我がものにすることができるかどうかという課題に直面している。いま、HIV訴訟支援や阪神大震災のボランティア活動など、青年、あるいは学生の社会的正義実現への動きがある。そのマグニチュードが僧職を目指す学生の在り方に多くの影響を及ぼすと考えられるのである。

我々は、学生に学習と生活の主体者としての在り方を修得させる責任を負っている。そしてその責任の立場からして、小学校から高校までの教育の在り方に対しても積極的な見解、要請を提起する社会的責任をも同時に果たしていかなければならないと考える。

なお、この機会に、「仏教教育の社会的役割」によせて、現代教育の民主的・国際的發展における宗教界の役割という観点から一言述べてみたい。

昨年(1995)年は、国際社会が戦後50年を迎えるに当たって決意された「国連寛容年」であったし、95年から国連による「国連人権教育の10年」が取り組まれている。日本政府もユネスコ国内委員会も、この国際社会の確認を国内に具体化する上で、ほとんど責任を果たしていない。国際社会が国際連盟の時代から、特別に重要視してきているNGOの活動の一環として、この課題へ取り組む日本の宗教界の積極的な役割が期待される。

日蓮宗では、部落問題の解決を巡って組織された「東京同宗連」に加盟せず、独自に人権委員会をもって、自主的な取り組みを展開してきている。部落問題解決の展望としても、国民大衆的な人権の徹底、一般民主主義的諸課題の打開、そして人権教育の徹底こそが基本的に重要だと考えられるのである。

仏教教育の社会的役割（の根拠）を どのようなところに求めるのか

立正大学教授 仏教学科主任 伊藤 瑞 叡

1. 宗教の社会に対するサイバネティクス・モデル

まず確認しておかなければならないことは、仏教は、宗教としては人文宗教、主義としては倫理的理想主義であり、哲学としては実践哲学である、ということである。

元来、宗教は社会に対して制御する機能をもつ。仏教も宗教である以上、例外ではなく、倫理的正当性としての規範をもち、それは法的規範、社会経済的、政治的な規範までをも制御し、更に社会国家全体を制御するように機能する。

これを日蓮聖人の実践的な思考方法に即して見るならば、宗教である仏教は、二段階三段階に社会国家を制御する特質をもつから、政治経済的な社会国家の根底に存在する規範となって機能する。しかも法華仏教の目的は「浄仏国土」としての立正安国と「一切皆成仏」としての衆生救済にある。法華仏教の機能が目的を達成するには、教・機・時・国・序の五綱の正しい関係を保持しつつ、正法が個人社会・国家社会の根柢に建立・定着せしめられなければならない。そのことによって、仏法が機能し、目的が成就されなければならない。仏教の社会教育の根拠はこの点にあるといえよう。

2、「仏教教育」とは何か

ルソーはその著書『エミール』において、教育とは、自己が自らのために生存する「自然人」という存在を、他人のために生きる「社会人」へと育成することだと述べている。人間の成長は一定の自然秩序に従うものである以上、自然を尊重する教育が大切であることは至極当然であり、教育もこの秩序に応じて変化しなければならない。その中で、まず自然人を作り、その自然人を社会人へと育成することが必要である。

これを仏教に適用して見ると、「自然人」は六道凡夫に、「社会人」は四聖、特に菩薩に照合するであろう。また「教育」は、仏教用語の「教化＝成熟」と同義であり、普遍妥当な道理に基づいて自己が人間として成熟してゆくことを意味する。仏教において、成仏こそ究極的目的ではあるが、仏教教育の目的としては、他人のために生きる（ことが真に自分のために生きる）人間である菩薩を育成することに主眼を置くべきである。

本化の教育は、教菩薩法による教無量菩薩畢竟住一乗であり、別言すると、化導の始終をもってする、種熟脱の三益となる。すなわち、私どもにとっての教育（＝教化）とは、自然（ものところ）の秩序である「妙法」（＝縁起・無自性空・諸法実相・本有妙法）に従って、一切衆生を自行化他する菩薩へと教化することである。

さらに『エミール』では、青年教育において宗教教育（特定の宗教ではなく、人間の自然的感情としての宗教心）が重要であることを明示している。

人間とは本来エゴイストであり、他人を損ない、やがて自分を損なう存在である。これは仏教でいう増上慢（abhimana）と同義であり、我執の存在、無明の存在である。したがって、自尊心の塊である自己中心的な人間から他愛心を養い、同情心を養うという、すなわち社会人として生きる自行化他の菩薩を育成する上で、宗教教育が必要となる。

では、宗教（的情操）教育とは何か。私どもの宗教的情操教育のポイントは、

究極的には智慧と慈悲の育成にある。人の悲しみを理解する心を養い、聖なるものを仰ぐということにある。

これを目的として行われる仏教教育とは、具体的には古典教育と訓育教育に重点を置きながら、垂範教育をもって、徳育と知育がなされなければならない。

しかし、今日の先進民主主義国では道徳的退廃が著しく、自由主義は宗教的道徳を否定し、ヒューマニタリアニズム（＝人道主義）ではなく、ヒューマンイズム（＝人間中心主義）の道徳に重きを置いている。これは世俗主義の道徳であり、その影響からか、大学生を取り巻く現代社会はアノミー（＝無秩序状態）となり、物質主義あるいは享楽主義が蔓延している。教育機関である大学自体の現状も、組織調整の低迷化、人間関係の陳腐化、研究教育の低俗化等の問題を抱えている。このような状況を矯正し、世俗道徳より宗教による道徳や人道主義による道徳へと導くために、私どもは日蓮聖人の提唱された一妙三秘を内的規範とする、仏教教育を実践する秩序を確立していかなければならない。

3. 三秘を内的規範とした教育方法

本化の仏教の根幹である三秘、すなわち本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目は、それぞれ三学の定・戒・慧に対応し、これを実践することで、身・口・意の三業を正しく整え、凡夫をして菩薩へと導くことができる。

ところで、仏教は生涯教育を担うものである。この三秘を応用すると、幼少年期・青少年期・老壮年期の三期にわたって、その実践徳目を提唱することが可能である。すなわち幼少年期は下種教育、青年期は調熟教育、老壮年期には得脱教育という、三益化導を適用して実践していくことが必要となる。

まず幼少年教育における下種教育とは、徳目として端坐修行（＝定＝本尊）・受食作法（＝戒＝戒壇）・合掌礼拝（＝慧＝題目）の三の要事をもって修養することである。この根本徳目を実践することによって、「かたちをつくって、こころをつくる」という幼少年期の教育を導くことができよう。

青少年教育に際しては、立志・立願を教えるべきである。三秘は正直捨権の道理（＝本門の本尊）・懺悔滅罪の戒法（＝本門の戒壇）・知恩報恩の妙行（＝本門の題目）という原理に置き換えることができる。方便・手段を確認し、その究極的な真の目的や当為や真実を追求すること、懺悔滅罪の精神とその行為を忘失しないこと、恩を知り恩に報いる四恩報謝を実践すること、これを教導するべきである。

最後の老壮年教育においては、正しい信仰生活を基盤として、お題目の功德による御守護（一妙）・本尊による御守護（本尊）・経力による御守護（題目）・神力による御守護（戒壇）・御先祖の精霊（を聖霊にすること）による御守護の5つを得ることが大切である。それによって永遠にして清浄なる聖なるもの（本仏）に守護されているという安心（＝解脱）を得ることが重要である。

4、社会の中の仏教教育

社会学でいう社会とは、人間と相即する人間結合・共同一般のことである。それは仏教でいう五陰世間・衆生世間・国土世間の三種世間に対応する。それらの相互依存関係を重視しながら、現実社会における教育の本質が自己教育にあることを確認しなければならない。それは本化仏教の自行化他を实践原則とする立場に対応する。すなわち、自行が自己教育であり、化他が社会教育と対応する。

自行化他を实践原則とする仏教教育とは、自己・家庭・学校の各教育とともに、社会教育の地位と役割を取得し遂行されなければならない。さらに、福祉事業の中にもその地位と役割を取得されなければならない。宗教的行為が社会的行為の一形態であるからである。

仏教教育が、社会に自行化他の教育を期待されているのと同様に、それを担う行為者（大学人・教師・僧侶）にも、義務あるエトス（＝行動様式）が期待されている。すなわち、一定の地位を占めた行為者は、品位ある行動様式をもつ

て、その地位等に見合うように行動することが義務づけられており、私どもはこのような社会的圧力に耐えなければならない。

しかし、仏教行為者はインテリぶった存在、学識徳望なき輩等と見られているのが現実である。よって、改めて仏教教育の行為者として期待される教師像が追求されなければならない。すなわち、仏教行為者は、教師も大学人も、本化の眷属として、本化仏教より信行学を要請され、一般社会より学識徳望を期待されていると自覚しなければならない。信行学が仏教教育の社会的役割の根拠となり、原動力となるからである。

5. 結論

私どもが担う仏教教育は、自行化他の妙法五字を内面的原則とし、四信・五品・五種法師行の規範に基づいて実践することが要請される。現実には、垂範教育によって古典教育・訓育教育を行い、教育する立場にある私どもも、自己自身を教育する己人教育に徹しなければならない。仏教教育は生涯教育であり、一妙三秘の内証の外用化をもってする三益化導が、幼少年・青少年・老壮年の三期に渡って、学校・社会・家庭といった現の場において遂行されなければならない。その究極的目的は、信と学を重要規範とする自行としての自己教育と、行を重要規範とする化他としての社会教育との両面において、浄仏国土と衆生皆成を達成することである。換言するならば、世界に対する明晰な解釈を与える妙法の秩序を、人間・社会・自然・環境にもたらし定着せしめ、衆生と国土を福德に充ちたものへと引導していくことである。そのために、聖なるものを仰ぎ、尊い人々にあやかろうとする態度も必要である。かくして畢竟人々の心の中に真の安心を与えることができるであろう。ここに、仏教者の社会的役割を担う教育原理が存在するのではないか。

大きく変動する社会の中で、 宗門子弟をどのように育成するか

日蓮宗宗務院教育課長 赤堀正明

1. 青少年と宗教

オウム真理教の問題は、現代の日本社会における多くの陥穽を浮き彫りにした。特に、戦後の学校教育の中で醸成された若者の行き場のない不安感を焙りだした。

ここに高校一年生、山野井創君が記した「素人の宗教」という、オウム信者に対する率直な感想がある。

ひとりで無視することは不可能である。何故なら、僕も、社会に生きているからだ。社会全体の風潮は、一個人ではどうとできるものではない。そんな時に、オウムの信者は“教祖様”に逆らう事ができたであろうか。僕らでさえ、僕らの教祖様—常識—に逆らう事はできていない。そうであれば、あの事件は、単なる宗教団体の暴走と見ていく事はできない。僕らは、それほど頼りない空間に生きているのである。

山野井君の作文の中には、オウム真理教信者への共感と同情、社会に対するどうしようもない無力感が読みとれる。この二点を貫いているのは、自らを含む同世代を支える思想信条の脆弱さであり、自らの置かれている社会の不確かさ、不安感である。

若者の無力感、不安感が横溢した結果については、オウム真理教に高学歴、特に理科系専攻の者が多かったことと密接に関係している。すなわち、若者は科学的合理主義に基づく教育への反動から、非合理へ指向し、オカルトへ強く傾斜したのである。彼らは管理化された社会の中で無気力化し、偏差値重視により個性は軽視され、マークシート方式のテストで思考力は低下した。テレビ

やテレビゲームは虚構に現実以上のリアリティーを付加し、若者たちは今、心身のバランスを失い、自己を喪失し、不安と多くの疑問を抱え、虚構の空間で迷っている。こうした閉塞状況を打開するために、彼らは宗教を強く意識している。大学キャンパス内でサークル活動紛いに宗教活動を行い、その活動に生き甲斐を見出している若者もいる。そうした若者たちが新々宗教に惹かれて入信していく動機として、体育（本来は身体と心の調整をはかる教育）・徳育の欠落、超越のアイテム・宇宙モデルの喪失などが主だったものとしてあげられる。これらは戦後の学校教育に欠如している部分で、本来は宗教教育によって担われなければならない。では現在、教育としての仏教はいかなる様相であろうか。

近代仏教学が始まって百年以上が経過し、仏教学は、知識の累積により対象を分析研究実証する对象的思惟を特色として、仏教の客観的理解と普遍化に貢献した。しかし、その反面仏教本来の戒定慧の三学による全人的思惟の方法が等閑視されるに至っている。前者を知識による理解、後者を智慧による理解とするならば、知識偏重、智慧軽視の教育が仏教教育として行われてきたことになる。智慧重視の教育とは、対象を判定するのではなく、そのもの持っている特質・個性を発見重視し、生かす方向を把持する教育である。このことの欠如が、現在における僧侶の社会への適応力の低下や、社会に対する仏教的視点からの発言が低下している最大の要因ではなからうか。ここに、仏教教育の問題が指摘されうる。

こうした学校教育と仏教教育に欠如している点が、今後の宗門子弟教育の中に組み込まれ、補完されていく必要がある。宗門子弟も、オウムの信者や不安を抱える多くの若者たちと同じ世代に生きる青少年である以上、若者たちが宗教に対して抱えている要求に目を向け、それに対応することによって、はじめに宗門子弟の教育について補うべき点が明視化されてくる。

ここで、青少年の宗教に対する干渉について、日蓮聖人の教義からどう応答

システムとして機能できるかを三大秘法によって考えてみる。

戒壇は徳育・体育に相応し、心身の調整をはかる。武道・気孔などの修得によりその発揚は促される。本尊は宇宙モデルを提示し、人類の企画を明確にする。また、題目は超越のアイテムを希求する若者に手掛かりを与える智慧の源泉である。体育を通して戒を、音楽を通して定を、文学・造形・芸術を通じて慧の修得に至ることにもなる。

今後は仏教が社会に機能するためにも、彼らの要望を知り、そこに立脚した教育というものを実践していく必要があるのではなかろうか。

しかし、現実はどうかという、新々宗教が台頭し、仏教をはじめとする既成教団を批判する中、我々は、それに対応してはいない。また、世界の宗教地図が塗り変えられようとしている現代、日本の既成仏教教団は何をしているのだろうか。宗教が、その方向を錯誤するのは、社会の動勢を無視することから始まり、墮落は社会に無批判に迎合することから生まれるのだ。

2、「仮称日蓮宗行学林」について

以上のことを検討した上での試案として、宗門の子弟教育に向けて「仮称日蓮宗行学林」という構想が提案された。

宗門の教師養成の現状と問題点は、教師になる以前、教師になる時点、教師の資格を得て以降の三期に分けられる。現行教育の問題点として「基本方針」「指導者」「養成機関」が欠けているため、既存の宗門関係各教育機関・僧堂などでの教育・修行が「統合」「体系化」されず、その結果各機関が相互の連帯を欠き、単に個人の知識・技術の習得の場としてしか機能していない。こうした問題点を解決するための試案が、法器養成プログラムの中核をなす行学林構想である。基本的コンセプトは、一年間の教程の中で、年中行事を習得すると共に教学・教化学・教化実習・法式実習を柱としたカリキュラムを組み、教える側と教わる側が生活を共にし、全人的な触れ合いの中で信仰を深め、一人一

人の能力を伸ばすための宗教教育である。

特色をいくつかあげると、全寮制を敷き、指導者と学林生が共に生活すること、一般の教師にも公開し、聴講制度を設け、生涯教育を扶助すること、宗門の教師候補生を同時に養成することにより教団内の団結力を高め、個人・寺院・教団の目指す方向性を統一すること等があげられる。カリキュラムは一年間で日蓮宗僧侶としての基本事項を修得できるように、声明・読経といった法要式部門はもちろんのこと、教化学概論・教団論・儀礼論・教育学・心理学・カウンセリング・教化実習等の教化学をはじめ、易学・ニューサイエンスといった一般学部門まで幅広い科目を自由に選択できるように設定し、応用力を高めることが可能となる。講師も研究者・実践者・一般人を按配し、多分野にわたる交流も積極的に企てる。また、立正大学や身延山大学とのカリキュラムの互換性を保つことも考慮されている。

こうした意見のように、これからの宗門子弟の養成は、従来の教育システムをより進化させたものでなければならず、信仰の基盤となる教養の修得、法儀の修得と寺院実務の研修はもとより、現代社会に対応し得る教化学と教化実践、一般学の習得といった現代社会の多元化に应答できる新しい試みが必要とされるのではあるまいか。

結び：仏教教育の現状と課題をめぐって

身延山大学学長 仲 澤 浩 祐

現代を特徴づけるものは、教育的側面からいえば、学歴社会と学校化社会である。高校教育においては、管理教育が増長し、偏差値教育を重視した輪切り選別教育が行われ、生徒たちは自らの意志に反し、不本意に各差づけられた大

学へと進学する状況となった。一方、高等教育機関への進学率の増大によって、いわゆる大学の大衆化が進んだ。この大衆化について、深山氏は、質的側面からとらえ、「大学・高等教育が広範な青年のものとなり、国民的アカデミズムが実現する可能性をもつもの」ととらえている。さらに70-90年代における高校のあり方を問い、自らの静岡大学、身延山大学での経験を紹介し、大学に進学してくる学生の実態を浮き彫りにした。いわゆる「考えない」学生気質ができあがり、無気力で主体性のない、万事につけて受動的な学生、不本意入学の学生が大学生として入学してきていることを指摘している。その上で、「教員は学生に学習と生活の主体者としてのあり方を修得させる責任を負っている。その点からして、小学校から高校までの教育の在り方にも積極的な意見・要請を提起する社会的責任をも同時に果たしていかなければならない」と問題を提起し、さらに国連が取り組んでいる「国連人権教育の10年」について、日本の宗教界の積極的な役割が期待され、“人権教育の徹底”こそが基本的に重要であると提言している。確かに日蓮宗では人権対策室を設けて、人権の問題に取り組んでいるが、仏教が「平等を説く宗教であることを標榜していることから、宗門子弟だけでなく広く積極的に「人権」そのものに焦点を当てて考え、検討し、「人間の尊厳」「自由」ということ、ひいては「生命の大切さ」を訴えていくことが必要である。今日のように、無雑作、無作為に人間の生命が奪われ、転倒の世界がますます深まり着実に人間の資質が低下してゆく中、伊藤瑞叡氏の言を借りれば、「現代社会はアノミー（無秩序状態）がますます深化し行く中、最も望まれるのは宗教教育、宗教情操教育である。」そこで、こうした状態にある学生を受け入れる大学側として、特に宗教教育を施す現場ではどうあるべきかということが問われることになるのであるが、伊藤氏は我々日蓮宗門人としての教育は、『智慧と慈悲』とを前提とした仏教教育の実践にあるという。つまりエミールが「自然人を社会人へと育成することが必要である」といっているように、仏教教育の目的も他人のために生きる人間としての

菩薩を育成していくことにあり、そのためには、「妙法」に従って一切衆生を菩薩へと教化することである。具体的には、三秘をもって戒・定・慧の三学に対応せしめ、身口意の三業を正しく整えることを基本としつつ学校、社会、家庭において教育実践がなされなければならないという。だが、私たちは多元化し、多様化し、個別化、孤立化、没社会化が進む中であって、科学万能の錯覚に陥り、現代の若者が抱いている不安や求めているものを見失っている。

この点、赤堀正明氏は次のようにいう。既成教団は現代の若者たちの要望を知ろうとしていない。若者が求める宗教は「可視的で束縛されず、個人単位で入信、脱退が自由にできる宗教であり、彼らの入信の動機は主として四つの喪失—体育・徳育の喪失、主体的積極性の喪失、超越のアイテムの喪失、宇宙モデルの喪失—にあり、これらは学校教育に欠落している。また近代仏教学による知識偏重、智慧軽視の教育は、僧侶の社会への適応の低下、社会に対する仏教的視点からの発言低下の最大要因となっている。」だから日蓮宗門の子弟教育には、学校教育と仏教教育とに欠落している点を組み込み、補完していく必要があるという。そして三秘を三学に対応せしめつつ、青少年を教育する方法として、体育的要素のあるもの（体を動かす楽しみ）、音楽的要素のあるもの（感動）、文学的要素のあるもの（見て考え、表現する）を教示していくことが必要であり、そのためにも青少年の要望を踏まえた教育実践がなされなければならないという。

さて伊藤氏は、仏教教育の究極の目的は「信と学とを規範とする自行としての自己教育と化他としての社会教育の両面において、淨佛国土と衆生皆成を達成することであり、そのためには聖なるものを仰ぎ、尊い人々にあやかろうとすることが必要である。」という。まさにここに仏教教育の根幹があるといえる。「聖なるものを仰ぎ、尊い人々にあやかろうとする」というこの情操こそが仏教教育に必要なのである。1966年、中央教育審議会は「期待される人間像」を発表したが、その中で『生命の根源すなわち聖なるものに対する「畏

敬の念」が真の宗教的情操であり、人間の尊厳と愛もそれに基づき、深い感謝の念もそこからわき、真の幸福もそれに基づく』と宗教的情操教育の基礎として「畏敬の念」を掲げている。つまり「聖なるものに対する畏敬の念」こそが宗教情操であるということにある。ところで価値のもつ意味によって情操は、道徳的情操、芸術的情操、科学的情操、宗教的情操に区分される。宗教的情操は「究極的絶対的な意味をもつ価値が志向されている場合、その価値と関わる情操をいう」(家塚武志「人間形成における宗教的情操教育の意義」-『宗教教育の理論と実際』日本宗教学会編、すずき出版、1985年、第一章第二節、25頁)。教育は人格の形成をめざすことにあるが、言葉を換えれば、情操豊かな人間性の実現にある。価値の創造は、誰にでも可能であり、日常生活において自他の生活に何らかの寄与ができれば、そこに価値の創造がある。逆境にあり、肉体的精神的な苦しみを克服しつつ生きていく生き方、たとえば、死期を知りつつその苦しみに堪えながら創造的に生きていることが価値そのものであり、さらにそのことが人々に大きな感動を与えるなら価値は増大する。この価値を持ったものに対して素直に感動できる心こそが豊かな情操なのであるが、「情操は精神発達段階と密接な関係をもち、ある一定段階にまで達しないと情操は発現しない。新生児ではたんに情緒だけしかないが、幼児期・児童期に移るに従って情緒は複雑に分化し、青年期にいたって初めて情操と名づくべき多くの感情が現れ、個人の精神生活の程度に従って発達が停顿したりさらに分化したりする」(『教育心理学事典』金子書房)という。したがって情操は個人の修養や教養の程度により著しい差を生じる。つまり人間は十人十色、それぞれの志向する価値はさまざまである。ある人にとって絶対的な究極的価値をもつものであっても、他の人にとってはあまりそれほど価値をもたないものもある。その点、伊藤氏が仏教教育を生涯教育ととらえ、幼少年、青少年、老荘年の三期にわたって三益化導の方法をもって教育することを提示していることは注目に値する。

また赤堀氏は、日蓮宗門の現状と問題点を分析し、宗門の子弟養成のプログラムの中核をなすものとして「仮称日蓮宗行学林」を提唱する。すなわち1)教師資格を得る以前、2)教師資格を得た時点、3)教師資格を得て以降の三期に分け、基本的コンセプトとして自主性を尊重し、教える側と教わる側とが互いに信頼を深め、できる限り対話に時間を割き、全人的な触れあいの中で信仰を深め、一人一人の能力を生かすための自由な研究時間をとるというものである。カリキュラムは教義の修得、法儀の修得と寺院実務の研修はもとより、現代社会に対応しうる教化学と教化実践、社会状況に相応するに必要と思われる一般学の修得をも含んで編成するものである。ここで一般学と呼んでいるものは易学・ニューサイエンス等といったもので、応用力を高めることを念頭に置いたものであるが、この行学林構想では、全寮制、聴講制度を導入することにより個人と寺院と教団との方向性を統一し、さらには相互の連帯感をもたしめ、日蓮教団の教育・修行を統合・体系化することをめざしている。確かに宗門の関係機関で行われている種々の講習会、講演会、研修会等は企画の段階から主催あるいは主管する側に任されているため、内容、日数、陣容、開催方法等一貫性を欠き、赤堀氏が指摘するように「基本方針」「指導者」「養成機関」いずれも宗門としてのアイデンティティーが欠けていることが知られる。

さて、立正大学も身延山大学もそれぞれ飯高檀林、西谷檀林に発し、仏教教育特に僧侶養成をも念頭に置いた教育機関として発展、展開してきたが、仏教系大学といえども、現行の文部省の設置基準に従って設立されている教育機関である。深山氏も指摘しているように、目的意識の希薄な主体性を欠いた学生たち、これは宗門子弟も例外ではないが、このような学生を前にして、どのように仏教教育行うか、具体的な教育施策を持ち考えていかなければならない。このことは常に変わらないことであるが、宗教情操教育が必要であることは、今や識者の多く語るところである。

戦後50年を経て、生活環境が激変し、生活様式は洋風化し、座の文化とい

われた日本の文化はどんどん省みられなくなっている。一方、先述したように、すべてが効率化、簡便化、省力化され、物の豊富な環境の中で育ってきた学生たち、さらにはメディア化が進む中であってヴァーチャルとリアルの区別がつかなくなりつつある若者・学生にどう対するか、また個を大切にし家や家意識からの解放と自立を求める傾向、いわば家族意識の変化が進む中で、生活活動をどう主体的にさせて行くか、今後の仏教教育・宗教情操教育に深く問われていることであろう。さらに子弟教育という点からいえば、如上のような社会環境の変化を踏まえて僧道教育のあり方、指導の仕方、方法等々一考することが必要となっているといえよう。伝統の存続は変革なしにあり得ないからである。

以上、『大学をとりまく社会環境と仏教教育』という表題の下に、三者の開陳・提示された問題点と課題を踏まえながら少しく付言を試みてきたが、最後に、広範な各氏の所論の整理、浄書を本学の三輪是法講師にお願いしたことを記して結びとしたい。